菊池川流域

シリーズ日本遺産 14

米作り、二千年にわたる大地の記憶

～菊池川流域「今昔『水稲』物語」～

問い合わせ先
生涯学習課
社会教育係
☎0968(25)7232

高瀬船着場跡（旧渡頭）

伊倉に残る中国人商人の墓（四位官郭公墓）

江戸時代の高瀬船着場の様子（復元模型）

米作りによる豊かな文化②（菊池川の水運）

下流の拠点、高瀬・伊倉

菊池川では、古くから船による交通が盛んで、上流から下流まで、地域を貫く人や物資輸送の大動脈として利用されてきました。

室町時代ごろに菊池氏が菊池川全体を勢力下に治めると、河口港である玉名市の高瀬、伊倉を利用して海外との交流が始まります。大陸や朝鮮半島との勘合貿易の拠点となり、戦国時代にはキリスト教の宣教師も訪れ、活発な交流活動が行われました。

加藤清正の肥後北部入国後には、菊池川の流れを高瀬・伊倉ルートから、高瀬・大浜ルートへと変更したことが伝えられています。これにより現在と同じ流路が整備され、旧流路付近は耕作地となり、江戸時代以降盛んになる干拓事業の下地となりました。

近世高瀬の発展

江戸時代になると、年貢米や物資を運搬するため、流域全体で舟着場の整備が進められます。現在の菊池市七城町の高島舟着場、山鹿市豊前街道下町の舟着場、和水町菰田の舟継所などがあり、年貢米は高瀬まで下って高瀬御蔵へ納められました。年貢米はここで厳重に保管・検査され、米市場のある大坂の堂島へと運ばれたのです。高瀬御蔵には、菊池川流域の玉名・山鹿・菊池・山本郡内からの年貢米が納められ、嘉永年間には最大25万俵ほどが集められました。文化年間の堂島への積み出し量は熊本藩全体で約40万俵。そのうち高瀬20万俵、川尻15万俵、八代5万俵と、高瀬で取り扱う年貢米の量が藩内最大でした。高品質と安定した供給量を誇る肥後米は全国各地の米が売買される堂島でも高い評価を受け、熊本藩の重要な収入源となりました。

菊池川水運の整備

江戸時代後半になると、高瀬のさらに下流の晒にも御蔵が整備され、高瀬御蔵の補助的役割を担いました。高瀬と晒には護岸の石垣と俵を積み出した石畳（俵ころがし）が現在も残っています。高瀬や大浜では年貢米の輸送に関わる廻船問屋が多く、水運が盛んになるにつれ町も大きく繁栄しました。

菊池川下流域では、特に江戸時代以降、高瀬を中核とした水運機能が整備され、地域の発展に貢献しました。

（担当：玉名市文化課）

位置図

大浜町外嶋宮蔵絵馬（復元）
菊池川河口に入る廻船を描いた絵馬（奥：大浜町、手前：晒）

菊池川 日本遺産 検索